

ずいそう

## 東京駅復元完成に思うこと 技術移転と熱意について



田丸正毅

先日、仲間と、復元なった東京駅を眺めながら、一杯飲む機会があった。

鉄道好きが集まったの会であったので、この重要文化財を前に、三階部分のレンガが少し違うとか、松本清張の「点と線」のころは九州行のブルートレインが何本も出発していたことなど、談論風発。建設機械が皆無の時代、よく人力だけでできたものだという感嘆の声や、無数の松の杭に支えられていた構造物が免震機構に支えられているという技術面の話や、空中権の売買と復元事業の関係といった経済の裏話、現在のゼネコン各社のルーツはこの駅の建設に由来するといった蘊蓄など、尽きぬ話に楽しい時を過ごした。

その東京駅の完成に、先立つこと50年。未だ、土木工学という言葉すらなかったころ、日本の鉄道建設に携わったお雇い外国人と呼ばれた英国人技師の存在と、その技術を数年のうちに吸収した、我々の先人の優秀さの話は、皆さんご承知であろう。

今から25年前の1987年、私は建設機械の現地生産工場の設立要員の一人として、英国北東部ニューカッスル近郊の町で働いた経験がある。

私の境遇と明治のお雇い外国人とは天と地ほどの差があるだろうが、少しは共感できるところがあるので、この機会に書いてみたい。

さて、当時の英国はサッチャー首相の時代で、工場周辺の町を歩いても、どことなくさびれた感じがあり、これが英国病というものかと思ったものだった。

私の職場は技術部だが、今のように3D-CADのデータを電子メールで送るといようなことは想像もできない時代で、日本とのやり取りはファクシミリ、最初は隣の会社の機械を借用して送った。

技術部としての初仕事は、製図板とドラフタを購入することだったが、これが日本との考え方の違いを実感する最初の機会であった。

機械製図一式をセットで購入すれば済むと考えていたところ、そんなセットなど聞いたことがないとのこと。そこで製図板の寸法、ドラフタの型式、定規の縮尺をすべて個別に選定し、やっと納入日を迎えたが、定規をドラフタに接続する金具がない。どうしてないのかと業者に聞くと、あなたが注文しなかったからとの返事が返ってきた。業者は人のよいおじさんで、意地悪をした様子ではなかった。

そういえばレストランでは、前菜、スープ、メイン、ディッシュを全部選ばないと注文は終わらない。日本のように唐揚げ定食、とんかつ定食のような概念はないようで、さすがにメインはジャガイモ、豆、温野菜は言わずともついているが、イモはフライかマッシュか、豆はさやつきかどうか、ニンジンに刻むか、一口大かなど、いやはや、これが彼らの常識というものと、実感した次第であった。

当時、英国人の工場従業員から尊敬を受けていた日本人スタッフがいた。お世辞にも英語が上手ではないが、技術の伝達に対する熱意は人一倍。

彼はチャールズ皇太子を迎える開所式の直前、英国の変わりやすい天気にも備え、工場の見学コースの雨漏りの確認のため、自ら屋根に上り、身ぶり手振りで雨漏りの処置を指示し、止められないところには通路に植物を置くというアイデアで無事乗り切った。

明治時代の日本に到着した英国人技師たちには、それこそ専属の通訳がついただろうが、短時間に日本人が技術を吸収できたのは、常識の違いを乗り越えた彼らの身ぶり、手振りを交えた率先垂範や、絵などを描いてくれたりし、我々に一生懸命技術を伝えようとしてくれたからではないだろうか。

その英国の工場に同じ時期に滞在し、今年の黄綬褒章に輝いた人がいる。

定年後の現在、彼は乞われて中国に渡り、溶接技能ばかりでなく、整理整頓からはじまる彼のノウハウをすべて伝承しようと張り切っているが、中国語はできないが、絵を描いたり、身ぶりで意志は伝わると、受賞談話で語っていたのは、英国時代の経験とあながち無関係ではないと思う。

この工場は、チャールズ皇太子の不死鳥のような復活と祝辞を賜った開所式から今年で25年を迎えることができた。5年前、初代の社長（故人）を先頭に、設立当時のメンバーでの20周年記念見学会に参加したが、街並みもきれいになり、リバーフロントに公園も整備され、英国病から完全に脱し、勢いが感じられた。

我々も熱意をもって何かに当たり、それを継続すれば、現在の日本の閉塞感はいつかは打開できると思う、今日この頃である。

——たまる まさたけ

コマツ 開発本部 業務部 規制標準グループ 主幹——